

石心桃夭

藤枝静男

石心桃夭

藤枝静男

せきしんとうよう

石心桃夭

昭和五十六年十月二十日 第一刷発行

著者——藤枝静男

© Shizuo Fuzieda 1981, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四三—二二(大代表) 振替東京八一五三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一五〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。

目 次

I

美術展への不満	11
悪口	14
ルオー展への勧め	17
虹	22
大赤字美術館長	24
愛らしさ（南京博物院展への期待）	28
美濃の窯	30
両方贗物	43
初期伊万里系「草花文釉裏紅皿」	48
やきものとの出会い	49
眠りを覚ます東海の名園	53

II

初めてお茶に呼ばれた	67
------------	----

眼鏡のツル	70
日々はポンコツ	75
わが巨木崇敬癖	79
書をめぐる個人的回想	82
睡蓮の葉に油虫 退治法知りたい	86
むかしむかしの藤枝町	87
浜松近辺	90
日日これ好日（節句前後）	93
わたしのすすめる味な店	96
コップ一杯のウイスキー	97
日本のカレンダー	98
梅干し	99
八百キロドライブ	102
北京三泊―石家莊三泊―太原三泊 ―大同二泊―夜行列車―北京	105

ツァイチェン爺さん……………130

Ⅲ

高麗人形のことなど……………137

瀧井さん……………145

尾崎一雄氏の文化勲章……………149

荒さんのこと……………151

城山さんのこと……………158

立原正秋君のこと……………161

きっぱり生きた男……………165

本多の姉さんのこと……………167

中村春二（私のなかの日本人）……………173

故榎本君の想い出……………179

平沢計七・鷹野つぎのこと……………183

鷹野次弥のこと……………201

IV

私の読書	213
外国文学と私	216
劉生の小説その他	220
富士正晴「高浜虚子」について	231
小川国夫著「流域」解説	235
小川国夫著「サハラ」の港」評	241
鬼のうわ皮がとれて	243
本来の心の暖かさと明るさが	243
金素雲氏の新著を喜ぶ	244
菅原克己著	248
「遠い城——ある時代と人の思い出のために」	248
中沢けい著「野ぶどうを摘む」評	250
「極楽」を推す——群像新人賞選評	254
他になし	256

野間賞受賞の言葉……………256

賞とわたし……………257

発表年月・掲載誌(紙)一覧……………261

石心桃夭

装帧
辻村益朗

I

美術展への不満

齡のせいかも知れないが、しかし確かに齡のせいばかりではない。

私は浜松に住んでいるが、新聞の文化欄を見ていると、あるいはテレビの紹介番組を見ていると、東京のデパートでは無暗矢鱈に「大美術展」がある。有名な美術評論家がそれを讃嘆し見どころを教えてくれるから、どうしても行きたくなる。会場がデパートの場合にはその店の広告に大きく出るから、次手があれば無理してでも用事にかこつけてひとまわりしてくるが、たいがいの場合はアテがはずれて帰りの新幹線で腹を立ててグッタリしている。あんな程度のを、見に行かなければ損みたいに宣伝して、そのうえ貴重品を外国から借り出して見せるについては多大の犠牲をはらったなどと思着せがましいことを云って、高い入場料をとり図録を売って儲けている。いったいどういう見なのだろう。癪にさわってならない。

明らかに羊頭狗肉と云っているのがある。羊頭ふた切れに狗肉八切れくらいの割合で、「本場物の羊頭」に「本場物の狗肉」が抱き合わせという人を馬鹿にしたのもある。セザンヌならセザ

ンヌで、アメリカや南米の大富豪のコレクションという唄い文句も好いけれど、いくらセザンヌらしい構図、モティーフ、タッチ、色感が十全にそろっていても、一枚のタブローとして見れば全然セザンヌでないというのがある。ゴッホにも沢山ある。真物の必ず持つ迫力がなく、コチャコチャして弱い。そういうのは学者には文句がなくても素人には直観でわかる。いったいに美術評論家は、定評ある人のものなら何でも解説し何でも感服するという公平さを持っているらしいが、もっと偏屈であつてもいい。無私もほどほどにしないと第一自分がつまらなくてやる気がしないだらうと思うがどうだらう。

偽物真物に関係なく、私が見に行つてゲンナリし、見終わつて列車のなかでグッタリする催しに博物館・美術館主催の「××特別展」というのがある。中身は立派な価値あるもので充満しているらしいから、日を決め時間をゆつたりとつてワクワクしながら出かけて行く。そしてまず入口に行つて「またか」とゲンナリし、入場料を払つて中に入ろうとして黒山のような人集りに五割がた勇気が挫けるのである。

まず第一室には三重くらいの人垣が密集して、ガラス戸に額を押しつけながら一寸刻みくらいに移動している。勉強家らしい女子高校生が手帖を出してひとつひとつ解説の札を写している。隣の友だちと大声の感想を交したり、先行した同級生らしいのを呼び戻して引っぱり込む熱心家もある。身長百六十二センチしかない私はこういう育ちのいい娘さんたちの後ろから首をのべしたり脊伸びをしたりしながら、覗き見の態で脚をずらして横に這つて行くが、やがては諦めて部屋の中央あたりに立つて未練がましくひとわたり遠望したのち次の部屋に移る他はないのであ

る。そしてそんなふうにながら二、三室進むと、今度はより大柄で遅しい現代男子高校生たちが、面白くもない一寸刻みの横江りに倦いたかして、仲間を突っついたり引っぱり出したりして部屋の真中でジャレているのに妨げられ、またも諦めて次の部屋に入って行くのである。

あるとき昼食前の私が草臥れはてて、ライスカレーかサンドウィッチの一皿でもと食堂の行列に近づくと、彼等は食券売場でチケットを買い、また列をつくって調理場まで行きついてコーラやアイスコーヒーを受取り、それから外に出てラッパ飲みしてその辺に用意されている木函に空饅を返しているのであった。後から後からと門を入ってくる制服姿の団体を見ると私はまったく意気沮喪し、あきらめて出口に向かう他なかったのである。

だいぶ前になるが、博物館で書蹟の大展観が行われたときも書道の先生に引卒された中年の女性群数団と遭遇してその風潰しの熱烈な鑑賞に圧倒され、また正倉院御物展では高校生諸君の後ろから脊伸びして頭の間にチラつく細かい国宝をかいま見て途中で諦め、五島美術館でのお光さま名宝展では庭にプレハブの女便所を二戸特設してなお行列という信者女軍の熱気に圧倒され、早々に退散しようとして相識の学芸員に救われるという経験もした——等々々。国民総美術好きという日本人の特性は画廊の爆発的増殖とともにますます発揮されつつあるように思われる。楽をして美しいものをゆっくりと眺めたいなどという悪い見はこの際捨てなければいかん、というのが正論だろうなどと考えながらも私みたいなのは寄る齢なみには勝てないのである。この頃ではなるべく朝のうちに駆けつけ、しかも混雑の一番ひどい最初のあたりはどんどん素通りして観客まばらな最終の部屋から逆に見て行くという方法を案出してやや成功していると云った有

様である。しかしそういう苦肉の策も、浜松から上京しなければならぬ私にとっては常に用いられるというものではない。十のうちせいぜい二回か三回が好いところだ。美術評論家の推奨で紹介されると、何となく見なければ後悔するような気になるのはこちらが悪いのだけれど、紹介する方にも罪はある。こういう粗悪な展覧会を見る度にブリヂストン美術館とか大原美術館とかいう個人コレクションの貴重さ素晴らしさを感謝したくなる。

悪口

ある朝、ある新聞の文化欄のつたある高名な美術批評家の文を読んで、またかと思っていやな感じがした。はじめその外国画家のモノクロームの小さい写真を見てよい絵らしいのでひきつけられた。そのわきに解説があつて「——八羽のかもめが飛び去ろうとしている。かもめたちは青く透明な空間に向かって飛んで行く。最後に遅れて飛ぶ一羽は、なぜ黒い羽なのか。羽音も聞こえず、ひたすらあの世に飛び去る。この心象的な画面からは、孤独を絶した内心の深淵をのぞき見る思いがする。うんぬん」とあつて終わりにこの画家はこの絵を描いた年に自殺したとつけ